
想いでの中から

ひろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

想いの中から

【Nコード】

N0375P

【作者名】

ひろ

【あらすじ】

桜小路 加良はある大きな傷を背負い生きてきた。

ある日、大嫌いな学園時代のクラス会に参加して、ある人物と再会した……。

再会（前書き）

この物語は、女性から見た、感じたBL物語です。

理解して頂けない方はご遠慮願います。

それでは、最後まで読んで頂ければ、幸いです。> m () m <

再会

第1章

少し高いヒールを履き、慣れない都会の喧騒の中を歩く。

人形のように整った顔に、腰までであるのではないか、と思うほど長い艶やかな黒髪が人目を引いている。

短い前髪は、学生の時のそれそのままだった。

今年26になるけれど、幼い顔はそのまま、薄化粧が妙に色気を発している。

普段であれば、その瞳も光を湛えた眩しいまでにキラキラしているはずだけれど今はその光を失い、ただ進行方向を向いていた。

出来れば参加等したくはなかった。

けれど、仲が良かった1人から、どうしても…と言われてしまえば、もう断れない。

一月前の電話で友人だった彼女は思わせ振りに『来たら驚くよ』と言う。

正直どうでも良かったが、愛想笑いをして桜小路さくらみち 加良からは、喧騒の中を歩いた。

「こ、こ？」

送られてきた葉書を睨みながら、店の名前を確認する。どうやら間違いないようだ。腕時計で時間を確認し小さく溜め息を吐く。そうして店の扉を開いた。

店の中は、小さな音でボサノバが流れている。海を思わせる装飾に、自然と笑顔が零れた。

店の名前は確かビーチサウンドとかいったか。加良は1人で納得し店の中を見渡した。

「加良！」

自分を呼ぶ声がある。視線の先に、前の友人が立っていた。彼女の名前は確か、雛奈ひなと言ったか。

加良は花が匂い立つような笑顔を浮かべ、周りの視線を独り占めした。

「お久しぶりです、雛奈さん」

笑顔のまま彼女に近づくと突然抱き締められた。

「相変わらずだね、加良！」

どう相変わらずなのか理解できないけれど、大人しくそのままにいる。雛奈は気が済むまで加良を抱擁し、漸く解放してくれた。

加良は気付かれないように小さく息を吐き、そうしてそのテーブルに視線を馳せた。

ざっと見て、10人位だろうか。同窓会と聞いていたからもっと居るであろうと置いていた加良は、肩透かしをくう。横でにこにこしていた雛奈に視線を向けた。その視線を汲んで、彼女は苦笑を浮かべる。

「今日はちょっとサプライズゲストが来るから、本当に仲が良かった奴しか呼ばなかったのよ」

本当に仲が良かった、と思われていた事を知り申し訳なく思ってしまった。

リーダー的存在だった雛奈は加良を2つ空いている席の1つに座らせ、反対側の自分の席に戻っていった。

雛奈の合図で宴がスタートする。基本お酒を呑まない加良は直ぐにソフトドリンクに切り替えた。

参加者は各々近い席の人間と昔話に花を咲かせている。けれど加良

は自分の横の席がいまだに空いている事が気になった。逆隣の人に聞いてみる

「来てのお楽しみだよ」

とはぐらかされてしまう。そうすると余計に気になってしまふのが人間の性分というもの。加良は目の前にある美味しそうな食事もそこそこに、さつき自分が入ってきた入口に視線を馳せた。

その時だった。

さつき入ってきた入口が開き誰かが入って来る。加良は目を凝らし、その人物を認めようとして、持っていたグラスを倒してしまった。

「ああ〜！加良、何してんのよ!？」

雛奈の大きな声も耳には入ってこない。

長い手足を優雅に揺らし歩いて来るその人物に、加良の瞳からは大きな雫が零れた。

ほっそりとしたその人は、全体的に色素が薄く、歩くたびに揺れる長めの髪も、まるで脱色したように薄い茶色だ。決して低くはないはずの身長は、しかし女性モデル位だろう。

ユニセックスのその人は、小柄な加良を認めると、こちらが赤面してしまうのでは、と思うほど綺麗な笑顔を湛えた。

「加良ちゃん、大丈夫？」

優しい懐かしい声。

「ま、つり…くん？」

涙で滲んだ視界に映った祀まつりは、少し困ったように笑い、加良の小さな身体をその腕に包みこんだ。暖かい抱擁に、幻ではない事を知る。言っただけの事は沢山有って、しかし加良の喉は言葉を発する事はなかった。

「加良ちゃん？泣かないで…困ったなあ…」

ポンポンと背中を擦られて余計に涙を誘われる。

そこにいた全員が2人を優しく見守り、そうしてうつすらと涙を浮かべていた。

雛奈の言葉に、漸く加良は顔を上げそうして2人は席についた。まだ瞳を潤ませていた加良だったが、初めての失態である事に気付いて苦笑を浮かべる。横に座った祀がふわりと笑った。

「ごめんね、加良ちゃん」

その笑顔が少し歪む。

何を謝っているのかは、多分解っているつもりで涙で崩れてしまった人形のような綺麗な顔を苦笑に歪めた。

「…いままで、祀くんは何してたの？…私は祀くんと京くんみやこに約束したように、ちゃんとあの…学園を卒業したよ…」

苦い物言いに、祀は加良の頭を優しく撫でる。

「噂は聞いてたよ。首席だったんだってね…。俺はね西多摩の方の高校に編入したんだよ？ちゃんと卒業もしたしね」

綺麗な顔をお茶目に崩し、祀はふわりと笑った。その笑顔が昔のままで加良は目を細める。

「加良ちゃんには…辛い思いをさせたよね？」

色素の薄い瞳を伏せながらの言葉に胸が痛んだ。

「違うよ！」

思わず大きな声が出てしまう。伏せられた瞳が揺れているように見えて、加良まで瞳を揺らせてしまう。

「2人とも大好きだったのに…私はその人達を守れなかった。謝るのは私の方よ」

しつかりと視線を上げ、祀を見詰めた。

「…転校した後、色々あったんだよ？加良ちゃんに又逢えたら、色々話そうと思っていたんだ。…聞いてくれる？」

何かを決心したような顔をし、祀は言う。断るなんて考えは毛頭なくて、加良は笑顔で話を促したのだった。

出会い

そこは、小、中、高一貫教育を行っている学園だった。

周りは緑に囲まれ、広々とした敷地が売りである。生徒も何処其処の子息、令嬢が多く在籍している、言わば金持ち学園であった。

桜小路 加良と 絢世 祀は小等部からの友人である。美男美女の2人は、学園の中でも一際目立つ存在であった。

もともと、桜小路家と絢世家は旧知の仲で、加良と祀は幼馴染でもあった。

「今日も美しいわね、あのお2人…」

登園してくる2人はあちこちからかかる挨拶に笑顔で応える。

「ごきげんよう」

「ごきげんよう」

姿もさまになっている2人は、実はお付き合いしているのでは？との噂的でもあった。

何をするにも2人一緒であったから、そんな噂が流れたのかもしれないが、加良と祀は否定も肯定もしなかった。

そんなお金持ち学園にも、高等部からは“外部組”というのが存在する。

所謂、エスカレーターで上がって来た加良や祀のようではなく、ちやんと受験をし合格した者たちである。

その中に、一際人目を引く存在があった。

「祀くん、知っている？」

加良の言葉に祀は小首を傾げる。

「何を？」

祀の返事に、加良は花の様な笑顔を湛えた。

「“外部組”の中に凄く“イケメン”…と言ったかしら？…凄くカッコいい方がいらっしやるみたいですよ。皆様が噂していましたの」

口元を隠しながらの言葉に祀は困ったように笑う。

「加良ちゃん、興味あるの？」

祀の言葉に加良は一瞬考え、

「どうかしら。…全く興味が無い、と言ったら嘘になるわ」

小悪魔のように小首を傾げるその姿に、たまたま通りかかった男子は人知れず赤面していた。

「じゃあ、僕が見てきてあげるよ」

祀は苦笑を浮かべそう応えたのだった。

色々な人に噂の真意を確認していた祀は、ある人物へと辿りついていた。

その人は、加良と祀の隣のクラスに居たのだ。

(灯台下暗し…だね)

一人でそんな事を想いながら、祀はある休み時間加良を連れ、隣のクラスを覗いた。

「加良ちゃん、あの人だよ？噂の彼は…」

祀の言葉に視線を馳せると、其処には物凄く長身な人物が立っていた。

ほりが深く日本人離れた顔には一重の鋭い瞳がある。その下には高い鼻梁があり、更に下に行くと、肉厚な色気のある唇があった。成る程、と思う色男である。

自分たちと同じように彼を見に上級生達までも姿を見せていて、加良と祀は苦笑を浮かべた。

「…祀くん、ありがとう。もう行きましょう」

祀の袖を引っ張ると、加良は歩き出した。すたすたとその場を後にする。そうして中庭にあるベンチに腰を降ろすと、とたんにくすくすと笑い出した。

「どうしたの？加良ちゃん」

戸惑いを含んだ祀の言葉に加良は更に笑みを深めた。

「なんだか、凄く面白かったわ。それに、彼は確かに“好い男”だったかもしれないけれど、私の趣味ではないわね。…祀くんの方が“良い男”よ？」

茶目っ気たっぷりの言葉に、今度は祀が笑い出す番だった。

「あなたが桜小路 加良さん？」

ある日の昼食時。

いつものように、校舎裏の木々が生い茂っている場所で祀と食事を摂っていると、突然に声を掛けられた。驚きの余りむせ込みそうになり、なんとか堪えながら涙目を声の主に向ける。そこには、前の人物が立っていた。

大きな身体は、2人に影を作る。

「桜小路さん？」

もう1度呼ばれて、急いで食べ物を飲み込み加良は応えた。

「そうですが…何かご用？」

返事に男は色気を放ちながら微笑む。

「俺、“外部組”の石和 京みやこっていいいます」

“外部組”を強調しながらの言葉に、しかし加良は別の事を思っていた。

浅黒い肌の襟元が微妙にはだけ、赤い痕が見える。

（あれは何かしら？）

痣のようにも見え、加良は素直に口にしてみた。

「お怪我をなさっているの？」

京は一瞬真顔になり、そうして加良の視線の先を追う。自分の胸元にその視線がある事に気付き、くつくつと喉で笑った。

何が可笑しいのかわからなくて小首を傾げる。祀が明らかに怒気を含み立ち上がるとした時、祀を目の端に留めながら笑みを引つ込め、加良の耳元に唇を寄せた。

「お嬢様、これは怪我ではなくて“キスマーク”と言うものですよ」

スツと唇が離れていく。

加良はしばしフリーズし、言葉が脳に届いた時、その顔を赤に染めた。

京はそんな反応を楽しむかのように笑っている。加良が怒りを表す前に、祀がその胸倉を掴んでいた。祀のそんな荒っぽい姿をあまり見た事が無かった加良はぼかんとしてしまふ。2人を交互にみ、急いで間に入った。

「ちょ、ちよつと祀くんやめて！」

加良の言葉に、しかし祀の目は怒りを静めていない。そんな祀を目の前にしているはずなのに、京は楽しげな顔を変えなかった。

「王子さま気取り？」

笑みを含んだ言葉に、怒気がぶわつと膨れるのが解った。いよいよ、まずい。

「…“おぼつちやま”に人が殴れるのかよ」

笑みを引つ込め挑発的な言葉に、祀の拳が宙を舞った。
ぱん！！

と大きな音が響く。祀と京の驚いた顔が加良を捉えていた。

「私の親友を馬鹿にしないで！！」

振り切った手をそのままに、加良は力一杯京を睨みつける。自分の思わぬ行動に驚きながらも、何故だかすつきりとした気分だった。

一瞬の間の後、京が相好を崩す。少なからず痛みを伴っているはずの頬を、しかし気にせずには笑う。その笑いが段々と大きな物に変わっていき、とうとうその場にしゃがみ込んでしまった。

加良は祀に目を馳せる。祀も加良を見、そうして首を傾げた。

「はあ…。腹いてえ、あんた俺を殺す気か？」

目に涙を貯めながら、視線を送ってくる。しかし、そんなつもりは毛頭無い加良は困惑で眉間に皺を寄せた。

京が立ち上がる。

「ただのお嬢様じゃないな、ますます気にいったよ、桜小路さん。

“加良ちゃん”って呼んで良い？」

笑みをなんとか引つ込めながら京は言うけれど、加良は迷惑そうな顔をした。

「加良ちゃん、俺とお付き合ってくれない？あんたの事大分気に入ったんだよね」

破顔しながら近づいて来た京に、加良はもう一度その小さな手を振り上げたのだった。

疑惑

「お断りします!!」

加良からの大きな声がする。ここ数日間、このやり取りが学園内に響いていた。

勿論噂にもなっていて、あちこちのクラスから中等部までその騒ぎを嗅ぎつけ見に来る始末。

「なんで？王子とは付き合っていないんでしょ？」

“王子”とは祀まつりの事らしい。加良はうんざりしながら京みやこの事を仰いだ。

「あなたには関係ないでしょう?!」

あの昼食時の事件から毎日、京は加良と祀の前に姿を現し加良に交際を申し込んで来る。

見物人が増え、静かに学園生活を送りたい加良は、イライラを募らせていた。

そんな加良を心配する祀は、なんとか京を遠ざけようと躍起になるけれど、京は引いてくれる様子はまるで無い。祀は途方に暮れるしかなかった。

「加良ちゃん、今なら大丈夫だよ」

自分たちの教室から廊下を確認し、祀が言う。加良は急いでお弁当を持ち、祀の腕を掴むと駆けだした。

なんとか京に見つからずに屋上へ辿り着く。

上がる息を整えながら、屋上に腰を下ろすと、盛大に溜息を吐いた。「大丈夫?」

心配そうな祀の声。加良は苦笑を浮かべながら頷いた。

「ええ、大丈夫」

なんとか整った息で伝えると、お弁当を開いた。母が作ってくれた美味しそうなお弁当に箸を付けると、ふと思う。

(どうしてかしら…。何故か、本気には思えないのよね)

そうして祀を見た。祀も思う所があるらしく、加良を見ている。一瞬間を置き、祀は口を開いた。

「加良ちゃんは何んであの人申し出を断るの？」

不思議な質問だった。ジツと祀の事を見詰める。瞬間、祀の白い頬が赤に染まった。

「いや、別にいいんだけど彼がどういう人が解らないじゃないか…お付き合ひしてみないと」

何故だか歯切れの悪い言葉に、やっぱり不思議に思う。

「そうかもしれないけれど、私言ったわよね？ “ 好い男 ” かもしれないけれど “ 好い男 ” ではないって…。それに、なんだか本気とは思えないのよ」

“ 好い ” と “ 良い ” を空に書き祀に説明した。

更に祀が何かを言おうとした時だった。

「ああ〜！！ やつと見つけた加良ちゃんと王子！！」

屋上に響き渡る大きな声。加良は溜息を吐いて、声の主を見た。

「 どうして私たちの邪魔をするの?! 」

苛立ちを込め言い放つと、京は悲しそうな顔をする。鋭い眼光から、今にも涙を零すのではないか、と思わせる程の顔に、加良は負けた、と思った。

ちらりと祀を見ると、やっぱり困惑気に顔を曇らせ加良に対し苦笑を見せる。

加良はもう1度盛大に溜息を吐き、京を見た。

「 わかったわ、石和くん 」

「 “ みやこ ” で良いよ 」

被せるように言われ、やっぱりイラッとしたけれど何故だか笑えてしまう。

「 わかったわ、 “ 京 ” くん。お付き合ひ、はできないけれどお友達 というのはどうかしら? 」

充分に譲歩したつもりだ。ちらりと伺う様に京を見ると、恐ろしい

程に艶やかな笑顔を湛え次の瞬間にはその大きな身体に抱き締められていた。

「ちよ、離して！」

突然の事にパニックになってしまった加良は、じたばたとあがいてみる。くすくすと祀の笑い声が聞こえて、加良は更に大きな声を出した。

「祀くん、笑ってないで助けて！！」

加良の叫び声に京が開放するのと、祀が割って入ろうとするのは同時だった。

真っ赤になった加良は更に文句を言ってやろうと京を見て、絶句する。くすくすと笑う祀に視線を向け、京は先程とは違う、とても優しい笑顔を湛えていた。

加良の中で何かが引つ掛かる。

京の優しい笑みを見ながら小首を傾げていた。

「加良ちゃん、王子！」

休み時間になると必ず現れる京。その懐き様に笑えてしまう。

「また、いらしたの？」

ちよっと冷たく言うと、京は直ぐに悲しそうな顔をした。

「王子、加良ちゃんが俺を苛めるよ」

泣き真似をし、祀の腕に絡みつくと京に、祀は微妙な顔を見せる。加良は祀を助けようと間に入ると京の妙な表情を見た。

「私の親友を困らせないで」

笑顔で京の腕を掴むと、まるで加良の事が見えていなかったようなそんな表情をし、そうして瞬間的に表情を変える。

妙な感覚に包まれた加良は、視点を換え京を観察する事にした。他愛もない休み時間。周りの好奇心丸出しの視線を感じながら、加良は視線を動かした。

京を見ると、またしても祀の事を見ている。もの静かな祀がひょん

な事から小さく笑うと京の表情がとても優しい物に変わる。

確かこの人は自分の事が好きだと言っていたのではなかったか。自分に向けられる視線と、祀へ向けられる視線の違いにやっぱり違和感を感じていた。

その時だった。クラスメートが加良を呼ぶ声が聞こえたのは。

「え？あ、はい、なんででしょう」

声の主を探し視線を上げると、教室の入り口に見覚えの無い女子が数名見えた。

明らかに自分の事を呼んでいるその集団に、加良は嫌悪感を覚える。しかし、どうやら用があるらしいので加良は席を立った。

「私に何かご用ですか？」

ぴりぴりとした空気が一気に加良を包む。嫌悪感を隠しながら笑顔を湛えた加良に、1人が歪んだ笑顔を見せた。

「ごめんなさい。桜小路さんにお願ひがありますの。放課後少しお時間よろしいかしら？」

丁寧な言葉に、自分の嫌悪感は勘違いだったかと思ひながら応じる。

「私で宜しければ…。何処に行けば宜しいのかしら」

「迎えに来ますわ。それでは又後ほど」

数名の女子はそう言い置いてその場を後にした。

席に戻ると祀が声を掛けてくる。

「どうしたの加良ちゃん、不思議な顔をしているよ？」

どうした、と言う訳ではない。ただなんとなく違和感と嫌悪感が残っていた。

「いえ、たいした事ではなくてよ？心配なさらないで」

ふわりと笑い、そうして京を見た。

「京くん、そろそろ休み時間は終わりですわ。御自分のクラスに御戻りになって」

やっぱり冷たく言つと、京は下唇をつき出し加良を恨めしそうに見る。

「え〜…」

その瞬間、チャイムが鳴った。加良は艶やかな笑顔を湛え京を再度見る。京は1度溜息を吐き、仕方ないと言う様に腰を上げ自クラスへ戻って行ったのだった。

「加良ちゃん帰らないの？」

放課後、席を立たない加良に祀が不思議そうに聞いてくる。2人を迎えに来ていた京も加良を見た。

「少し用事がありますの、お2人は先にお帰りになって」

笑顔で答える加良に祀は困惑しながらも了承した。

「じゃあ先に帰るね」

祀と京の背中を見送り、加良は再度自分の席に座った。

あの女子達は迎えに来る、と言っていた。いつの間にか誰も居なくなつた教室は随分と寂しく思えて、加良は溜息を吐く。窓の外を見ると、祀と京が歩いて行く姿が見えた。

何時の間にかうす暗くなつて来た教室に、休み時間に姿を見せた数名の女子が現れた。

「桜小路さん、お待ちせいたしましたわ」

1人の女生徒が、明らかに作っていると分かる笑顔を湛え加良の腕を掴む。

別の生徒が嫌な笑顔を浮かべながら加良に一步近づいた。

その妙な感覚に怯えを感じた加良は一步後に下がろうとして、何時の間にか後ろに回り込んでいた別の生徒に逆の腕を掴まれた。

「綾瀬さんは御一緒ではないの？」

嫌な笑顔の生徒にそう言われ、もう何が何だか分からなかった。

「え、ええ、先に帰っていたきました」

その瞬間衝撃が加良を襲い、小さな身体が教壇に強かぶつかる。今までに無い痛みにも声も出せずに蹲るしかなかった。自分に襲いかかつた痛みが、突き飛ばされた物だと分かるのに時間が掛った。

痛みと恐ろしさに涙が浮かび、それでも顔を上げる。きゅっと口を

引き結び、彼女たちを見た。

「あなた、何様だと思ってるのよ！」

徐に浴びせられる罵倒に困惑する。震える唇をなんとか動かし、声を発した。

「い、意味が解りませんわ」

もう、彼女たちの顔には笑顔は無い。

「解らない？ふざけんじゃないわよ！」

そう言われても加良にはさっぱり解らなかつた。

「綾瀬さんを1人占めするだけじゃ物足りなくて、石和さんまで誘惑しないでよ！！」

強い口調でそう言われ、加良は絶句する。

「石和さんは私と寝たにの、あなたの所に行ったとたん相手にしてくれないのよ、冗談じゃないわ！！」

はたと、あのキスマークを思い出す。どうやらあれは彼女が付けた物らしい。どうやら、彼女たちは京の御友人らしく、加良は誤解されているのだと解った。

「ちょ、ちょっと待って！私は京くんとは」

「名前で呼ばないでよ！！」

京の名前を口にした途端に1人の女生徒が涙を浮かべながらヒステリックに叫び、加良の長い黒髪を掴んだ。そのまま引き上げられて加良の顔が痛みに歪む。

髪を掴んだ女生徒が腕を振り上げるのを目の端で捉え、加良は次に来る衝撃を覚悟して目をきつく閉じた。しかし、直ぐに掴まれていた髪が開放される。そうして彼女の小さな悲鳴がその耳に入った。何が起きたのか解らずに、目を開けようとした加良の耳に、聞き慣れた声が聞こえる。

「加良ちゃん、大丈夫?!」

祀だった。その瞬間、加良の瞳から涙が零れる。

「ま、つりくん……」

先に帰ったはずの祀の声に安堵し、目を開けると祀の姿越しに京の

姿もあり、彼が彼女の腕を掴み上げているのが認識できた。続いて低い声が地を這った。

「何やってんの？里香ちゃん、乱暴は駄目だよ〜」

何時ものおちゃらけた言葉なはずなのに、あまりにも怖い。腕を掴まれてる彼女は今にも失神してしまいそうな程青い顔をしていた。

「わ、私は…」

「石和くん、そんなにこの女が大事なの?!」

別の女生徒が悲鳴のような声を発する。振り向いた京の顔は、表現できないような物だった。

「俺の親友に手を出すな。…消えろ!!」

地を這う様な恐ろしい言葉に、女生徒は泣きながら駆け出す。加良はあっけにとられ、涙はもう止まっていた。

彼女達の姿が見えなくなると、京も直ぐに加良の元に駆けつける。

「加良ちゃん、大丈夫?…ごめん、俺のせいで…」

とても辛そうな顔に、凄く腹が立ったけれど怒る気にはなれない。しかし、祀は違った。物凄い勢いで京の胸倉を掴む。

「京の行いのせいで加良ちゃんが何故痛い思いをしないとイケない。これ以上害が及ぶのであれば、君との友情はなかった事にして頂こう」

丁寧な言葉だけれど、怒りがふつつつと伝わって来て加良は困惑した。そうして京の顔を確認する。

「…本当にごめん、殴って良いから、だから…」

打ちひしがれた顔の京が其処にいた。祀に嫌われてしまうのが心底悲しい、とその顔には書いてあって、『だから』の後に続く言葉がなんなのか解った。加良の中で燻っていた何かの形を成して弾ける。まるで、目から鱗のように。

成る程…と冷静に物が見えて来て、加良は小さく笑った。

その笑い声に鋭く反応したのは祀で、小さくくすくすと笑う加良に困惑で一杯の視線を送ってくる。加良は笑いを堪え、にっこりと笑顔を作った。

「祀くん、離してあげて？」

加良の言葉に、今度は京が困惑気な顔をする。

「大した事はないわ。それに彼のせいでもない。これは私が気を緩めたのがいけないのよ。だから、京くんを許してあげて？…ね？」
まだ、京の胸倉を掴んでいる祀の腕にそっと触れながら伝えると、
渋々ではあるけれどその手を離れた。

加良は少し汚れてしまった制服のスカートを手で払いながら、2人を見る。

「加良ちゃん…、本当にごめん。もう2度とこんな事がないように注意する。許してくれてありがとう…」

弱弱しい京の言葉に加良は優雅に笑う。

「そうして頂けると助かるわ。…そうだ、京くん、後で少しお時間頂けるかしら？少しお話したい事がありますの」

加良の言葉に、京は首を傾げながらも了承したのだった。

真実

「加良ちゃん、話つて…?」

とても緊張した京の声に加良は笑みを深めた。

ここは加良の家の近くにある、静かな公園。祀にはお願いして先に帰ってもらっていた。

「座りませんか?」

近くのベンチにそう言いながら腰を下ろす。加良にはどうしても京に確認しなければならぬ事があった。

それは初め、小さな棘のように加良の胸に刺さっていた。その小さな棘が、早くも大きな物になり、そうして今日ある意味確信を得た気がしたのだ。しかし、それが本当に確信なのかはつきりさせなければならぬ。だから、祀には席を外してもらったのだった。

京は加良の言葉に、恐る恐るといった感じでベンチに腰を下ろす。それを見届けた加良は口を開いた。

「京くん。私はあなたと本当にお友達になりたいの。だから敢えて聞くわ。京くんも嘘は吐かないでね?」

前置きに京が小さく頷く。加良は深呼吸をし、一気に言った。

「京くん、私の事が好きって言うのは嘘よね?…あなたの好きな人は祀くんでしょ?」

一瞬、外気の音が一切遮断された気がした。京の耳には、加良の声以外は音として届いていない。

ゆっくりと息を吸い、京は声を発した。

「や、だな、加良ちゃん、冗談きついよ。そんなわけ」

「嘘は無しって言ったわよ」

誤魔化そうとする京の言葉を、加良の鋭い声が遮断する。

ジッとお互いを見詰めた後、先に視線を逸らしたのは京だった。ハハッと小さく笑い、そうして諦めたかのように、頭を垂れる。

「なんで…わかった？」

小さな京の声がした。

加良は優雅に微笑むと、京に視線を向ける。

「私の事を好きと言ってたけれど、京くんの視線の先には祀くんしか居なかつたわ。初めは何か可笑しいと思ったけれど、その視線に気付いたら全てが何となく解つたような気がしたの」

京の顔が苦笑に変わった。

「気持ち…悪いよな、男を好きになるなんて」

その言葉に加良は目を吊り上げた。

「私の事をそんな狭量だと思ってるの？…気持ち悪いだなんて思つていないわ。人が人を好きになるのに性別なんて関係ないわよ。だから京くんもそんな事言わないで下さる？」

加良の強い言葉に京は頭を垂れる。その姿に加良はくすくすと笑つた。

「…初めて王子の姿を見た時、とても輝いて見えただ。俺には無い輝き…。最初はこんなに綺麗な男もいるもんなんだな、とか思つてただけどさ、何時の間にか目でその姿を追うようになってた。

その隣には何時も日本人形みたいな綺麗な女の子がいてさ、その子が王子の彼女なんだと思つた」

京の告白に、加良は首を傾げる。

「それって、もしかして私の事？」

そう、と小さな京の肯定に加良は苦笑を浮かべた。

周りの人間に、自分と祀がどのように映っているかは何となく解つていたけれど、このように言葉にされると困ってしまう。

「その時初めて自分が王子の事好きなんだと自覚したんだよ」

今度は加良が小さく、そう、と答える番。京の告白を促すと、自嘲気味な笑いが聞こえた。

「まさか自分が男を好きになるなんて思つてもみなくて、何かの間違いだつて思いたくて言い寄つて来る女と付き合つてもみたんだ。でも駄目だつた…。忘れる事なんて出来なくつて、学校で何時も王

子と加良ちゃんの姿を追ってたよ」

私も入っているの？とちゃめつけたつぷりの加良に京は頷く。

「どうしても2人に近づきたくて、加良ちゃんに告白したんだ…。

酷い嘘を吐いてごめん…」

京の告白と謝罪を聞いて、加良はまたしても優雅に笑った。

「気にしていないわ。どんな理由であれ、今私はあなたとお友達になれて嬉しく思っているの。だから、もう謝らないで？」

加良の言葉に、京の鋭い眼光から雫が垂れた。

「…加良ちゃんにはまいったよ…」

そんな言葉でその涙を隠す。全ての告白を聞き終えた加良には、もう1つ、京に言おうと決めていた事があった。再び深呼吸をし、京を見詰める。

「京くん」

口調が変わったのが解った京は、涙を拭い加良に視線を向けた。

「はい？」

返事に、一拍の呼吸を置く。

「…祀くんに想いを伝える気はないのかしら？」

京の動きが止まる。瞬きすら忘れてしまったかの様に加良を見詰めていた。

「どうなるかは私にもわからないけれど、そこまで想い詰めているのなら、いつその事気持ち伝えてみたらいかが？…もし駄目でも私は京くんとずっとお友達よ？きつと祀くんだってそうだよ」

カラッと笑った加良に、京は再び頭を抱え、

「本当に…加良ちゃんにはまいったよ…」

と先程と同じ言葉を吐いたのだった。

確信を得た後、京は変わった。

以前は何気ない優しさを祀に見せていたが、今はよりリアルになっている。そんな京を加良は優しい気持ちで見守っていた。

しかし1つ気になる事がある。

それは、祀だった。

より3人で居る事が多くなり、何故だか祀の元気がないように感じる。何気ない瞬間に、小さく溜息を吐くようになっていたのだ。

それは、決まって京が加良に対しふざけている時に感じる違和感。可笑しい、と思った加良は京が居ない時に言葉にしてみた。

「どうされたの？祀くん」

加良の言葉に一瞬ぼかんとした祀は、困惑気に加良の顔を見る。

「え？…何が？」

祀の返事はごく当然のもので、加良は苦笑を浮かべた。

「…最近、なんだか溜息が多いわ。何か悩みがあるなら、親友の私に話してみませんか？」

自分の溜息を、まさか気づかれているとは思っていなかったのか、祀はとても驚いた顔をした。

「…溜息？…していたかな、僕」

歯切れの悪い物言いに、加良の方が戸惑う。

“王子”と呼ばれている祀は、その外見からとても大人しい、物静かな人物と思われがちだが実はとても気性がハッキリしており、物を濁す事は無いのだ。だから以前加良が女の子に絡まれた時、京の胸倉を掴むような事をしたのだ。このように歯切れが悪い物言いをする筈がなかった。

なのに今はこの物言い。絶対に可笑的い、と加良は思った。

「ええ、していたわ。今の祀くん、なんだか可笑的いわ？祀くんじやないみたい」

眉間に皺を寄せながら加良は一気に言切る。祀の視線がフと下がった。

「…加良ちゃんには隠し事なんて出来ないね…」

悲しそうな笑顔。

今にも消えてしまいそうな儂いその笑顔を見て、加良は息を飲んだ。「そんなに深刻な事？」

自分こそが儂い表情をしているとも気付かずに、加良は小首を傾げる。

祀の白い顔が困惑に歪んだ。

「…深刻、と言えばそうかな。…自分でも戸惑っているんだよ、加良ちゃん」

心底戸惑っています、と言う様な顔をされる。

「それは、私にも話せない事なのかしら？」

真剣な眼差しの加良に、祀は小さく笑った。

「…僕の事、軽蔑しないって誓ってくれるかい？」

軽蔑、される様な事なのだろうか。加良は頭の中で色々と考えたが答えが見つかる訳もない。1つ息を吐き、祀を見返した。

「勿論、誓えるわ。例えば祀くんが人を傷付けるような事をして、私は、私だけは味方だわ」

胸を張って言う加良に祀は心底からの笑顔を加良に向ける。息を飲む口を開け何かを言おうとした時だった。

「王子、加良ちゃん!!」

元気な声が後方からする。京の良く通るバリトンだ。

加良は困ったように眉を八の字に下げる。祀も同様な表情をし、そうして吹き出すように笑った。

「加良ちゃん。今日家に行っても良い？」

笑いながらの言葉に、加良も笑いながら頷く。近くまで来ていた京は、そんな2人を見、不思議そうな顔をするのであった。

「どうぞ」

と言う加良の言葉と同時に部屋の扉が開かれる。2間続きになっている大きな部屋が加良の部屋だった。

モニターで綺麗に統一された1間は勉強机にPCデスク。そうして大きな本棚が壁に備え付けられている。そこにはびっしりと色々な本が、やっぱり綺麗に収納されていた。

続きのもう1間が寝室になっていて、記憶の中では、大きなベッドが備え付けられていたはずだ。

ふかふかのソファ―に腰を下ろした祀に加良は温かい飲み物を差し出してくれる。

祀はそれを受け取り、加良が腰を下ろすのを待った。

「この部屋に祀くんを招いたのは久しぶりよね？」

優雅に微笑みながら加良は祀の横に腰を下ろす。祀は小さく頷いた。

「さて…、お話の続きをしましょう？祀くん、何があったの？」

瞬間的に真剣な表情をし、加良がきりだす。祀は小さく息を吸い、加良を見た。

「うん、加良ちゃん…」

その声が震えているように感じられ加良は、近くにあった祀のすべすべとした手を握った。

励ますようなその感触に、祀は微かに笑みを浮かべ意を決したように口を開いた。

「僕…可笑しくなっちゃったのかな…？」

意を決したはずの声は、しかし微かに震えてしまう。加良は握っている手に更に力を込めた。

「どうゆう、こと？」

慎重に言葉を選びながら確認する。

「僕…京の事みているのが苦しいんだ…」

搾り出すような声に、しかし加良は一瞬止まりそうして全てを悟った。

笑い出しそうになるのを必死に堪えながら、次の言葉を促す。

「どういう事？漠然すぎて解らないわ」

そう言うと、祀は少し困った顔をした。

「うん…僕は心が狭いのかな…？」

泣き笑いのような事を言いながら、核心をはぐらかそうとする。加良は小さく溜息を吐いた。

「祀くん？らしくないわ…はつきり言って」

少し棘を含ませた加良の声に、祀は困惑する。ちらりと加良を見、そうして1つ呼吸を吐いた。

「京が加良ちゃんの事を好きなのは初めから解ってるのに、3人で一緒に居る時京が加良ちゃんと笑っていたり、加良ちゃんに優しくしているのを見ると、ここが苦しくなるんだ」

ここ、と己の胸を押さえながら、吐き出すように言う。自分の考えは間違っていないかったと加良は思いながら、少し意地悪な質問を試してみた。

「祀くんは私の事が気になるの？私の事が好きなの？」

祀の動きが止まる。30秒程そのまま固まった後、ゆっくりと加良の方へ顔を向けた。

その顔はとても困った様な、傷ついている様な、なんとも言えない複雑なものだった。

今度は加良が複雑な顔をする番。

「違うわよね？私の事が好きなのではなくて、祀くんは京くんの事が好きなのよね？だから私とじゃれ合っていると、“そこ”が苦しくなるんだわ」

祀の胸を指しながら、ゆっくりと言い聞かすように言うと、祀の瞳からは大粒の涙が溢れた。加良の溜息が聞こえる。

「祀くん。自分の気持ちは解っているはずよ？目を逸らすなんて間違っているわ」

はっきりと言うと祀は項垂れるように頭を落とした。

「祀くん、そうでしょう？…自分の気持ちははっきりと口になさい。私はどんな時でもあなたの味方なのよ？」

小刻みに震えている祀の肩に手を置き、諭すように伝えると祀の細い身体が加良を包んだ。

どんなに線が細くとも、祀は男の子で加良は隠れてしまう。

ぽんぽん、とあやす様に背中を叩くと、消えてしまいそうな小さな声が聞こえた。

「…京の事が好きなんだ。僕、どうしたらいいの…？加良ちゃん」

切羽詰まったその声に、知らず知らずのうちに加良の瞳にも涙が浮かぶ。

「大丈夫よ、祀くん。心配ないわ……」

全てを知っている加良は、祀を抱き締めながら言ったのだった。

天使の矢

季節は過ぎ、文化祭の時期になっていた。

クラスが俄かにざわついている中、加良は溜息を吐いていた。

2人の気持ちを知っているのは加良1人。誰かに相談したくてもできなくて、それでいて何の進展もない2人を見ていると、何故だかイライラしてしまう。

あの後も2人は微妙な空気を作りながら、それでも友達として付き合っている。

両想いなのに、何時までも気持ちを伝えない2人にイラつきを覚えていた。

けれど、2人は男同士。大きな壁がある事も承知している加良は、どうしたものかと考えていた。

「…加良ちゃん？何かあった？」

物思いにふけていた加良の耳に京の心配そうな声がする。

はつと頭を上げると、祀も心配そうな顔をしていた。

「いいえ、何でもありませんわ。ところで京くんのクラスでは、どんな催しをされるの？」

さりげなく話題を変える。祀もそれは気になっていたらしく、頬を綻ばせながら京の顔を見ていた。

祀に注目されている事が嬉しいのか、京ははにかみながら祀を気にしつつ質問に答える。

「うちはお化け屋敷だとさ」

興味なさそうに言いながら、それでも視線は祀へと向けられており反応を待っている。

そんな京を見ていると、なんだか阿呆らしくも思えてくるけれど、祀の熱の籠った視線を見るとそうも言っていられないと思った。

「そっちは？」

京の言葉で祀が答える。

「こつちは喫茶店だって、ね？加良ちゃん」
話を振られて、慌てて加良は頷いた。

頷きながら加良の頭はフル回転する。何か良い案は無いかと思案している、ふと頭の中にある噂が思い浮んだ。

それは中等部の頃、ある女子生徒から聞いた話だ。

高等部の図書室にあるという“フリーペーパー”と言う分厚い本に、想い人の名前を書きその想いを綴った紙を入れ、1週間誰にも見づからずそのままにし、1週間後その紙を燃やすと想いが通じる、という物。

占いのような物だとその子は言っていた。

これだ！！

と加良は思った。

ちらりと、隣を歩く京を見る。その視線に気付いた京は小首を傾げた。

逆隣を歩く祀に聞こえないように京を手招く。

近づいて来た京に耳打ちした。

「京くん、知っていて？」

小悪魔のような笑みを浮かべながら言う加良に京は少し困惑しているように見受けられる。

加良は構うものか、と思いき言葉を続けた。

「良く効く占いの話ですの。それはね…」

先に聞いた話を少し変えて話す。聞き終えた京はその切れ長の瞳を大きく開いた。

「ただの噂でしょ…？」

困ったような、馬鹿にしたような表情。加良はそんな京を睨み付けた。

「噂かも知れないけれど、何もしないよりマシだわ。今の京くんには神だのみでも必要じゃなくて？」

少し突き放すように、挑発するように言うと京は口ごもる。

加良はにこりと笑い、

「明日試してみて」

と伝えると今度は祀に目を向けた。祀も加良の視線に気付いたよう
で、笑顔を浮かべる。

加良は先ほどと同じように祀を手招きし、その耳にこっそりと先の
噂をまた少し変えて耳打ちした。

「祀くん、知っていて？ある噂のだけれど…」

最後まで聞き終えた祀は、その白い顔をほんのりと赤に染めたのだ
った。

「私が一緒に付いて行くわ。今日の自由時間なんてどうかしら？」

何かを含んだような加良の笑顔に、しかし祀は小さく頷いた。

午前中一杯自らのクラスの催し物である喫茶店を手伝った加良と祀
は、午後一で自由時間となり、加良は祀の手を引くと噂の本を探し
に図書室に向った。

流石に文化祭という事もあり、図書室は誰も居ない。

加良と祀は本棚を食い入るように見ながら、先の本を探した。しか
し、なかなか見つからない。

もしかして、そんな本は存在しないのではないかと不安になって
きた加良の目に、それは映った。そつと手に取ってみると、今にも
崩れてしまうのではないかと思うほどぼろぼろな本。その表紙を開
き中を確認した後、祀を呼び寄せる。

「見つけたわ」

慎重に祀に本を渡すと、祀の頬が再び赤に染まった。

ちらりと加良を見ると、加良は大きく頷く。祀は小さく畳んだ紙を
ブレザーの胸ポケットから取り出し、そつと表紙を開けたところに
挟んだ。

翌日、文化祭2日目。再び加良は図書室に居た。

その隣にはやつぱり神妙な顔をした京が立っている。そうして再度あの本を探した。

と言っても加良には其れが何処にあるのか解っている。

探すふりをし、京からは死角となつて見えないところにその本を持ち向う。そうして表紙をそつと開いた。そこには昨日祀が想いを綴った紙が挟まられている。加良は其れを大事そうに抜き、その中身を読んだ。

『石和 京 とても大切な人。この想いはきつと伝えられないけれど、多分ずつと想い続けるのかもしれない。まさか自分が男の人を好きになるなんて思いもよらなかつたけれど、この気持ちは大切にしていこうと思う 絢世 祀』

祀の几帳面な文字が並んでいて、その内容に加良の目頭が熱くなる。ゆっくりと息を吐き、その紙を再び丁寧に畳むと直ぐに落ちるように表紙を開けたところに挟んだ。そうして京を探す。加良は想いを込め、本を1度抱き締めると視界に入った京を呼び寄せた。

「京くん、きつとこの本だわ」

慎重に本を手渡す。

「…ぼろぼろだな」

そんな感想を述べながら困惑気に本を受け取つた京を確認すると、

加良は踵を返した。

「え？加良ちゃん？！」

急いでそんな加良を呼び止めようとする京を振り返りながら、加良は想いを込めて言葉を投げかけた。

「いい？しつかりとやるのよ！」

風のように去つていった加良の背中を仰ぎながら、手の中にある本をジッと見詰める。

占い、なんて信じた訳じゃない。だけれど、この報われない想いは

余りにも重過ぎて、何かに託したいと思うのもまた事実だった。京は深呼吸をし、そつと本の表紙を開くと、ぱらりと何かが落ちた。

急いで其れを探すと、自分の足元に落ちていて何かに吸い寄せられるかのように手に取る。開きかけた小さな紙の端に“石和”と書いてあるのが見えて、一端止まる。

加良からの励ましの手紙だと思った京は其れをゆっくりと開いて中身を読んだ。

途端に顔が熱くなるのが解る。そうして、赤くなった顔を隠すように手を顔の前に翳した。

脳裏に昨日の祀の姿が想い浮ぶ。

何時ものように一緒に行動しようとする午前を終わらせた京は2人の姿を探していた。

廊下の向こうに2人の姿を確認した京は、手を振りながら近づいたのだ。

その時の祀は、加良に顔を向けその白い顔を赤に染めている。そうしてなかなか京の事を見ようとしなかったのだ。

自分は又何かしてしまったのだろうか、と想い悩んでいた京は、しかしそうでは無いと今知ったのだった。

そうして加良のあの去り際の言葉を思い出す。

『しっかりとやるのよ!』

加良は京の想いも、祀の想いも知っていたのだ。知っていて今回の占いの事を自分に伝えたのだ。これはつまりそういう事なのだ。想いを伝える、それも京から…。

其れに思い至った京は、大きく息を吐きそうして前を向いたのだった。

手の中にはあの紙が握られている。

普段誰も来ない屋上に京は立っていた。

下では文化祭が盛大に行われており、その喧騒が微かにだが京の耳にも届いている。

けれどこれから自分が行う、一世一代の事を思うと全てが聞こえなくなつた。

「京？どうしたの改まって…」

目の前には愛おしい人が、吹きつける風に舞う髪を手で押さえながら小首を傾げている。

「ごめん、急に呼び出して…」

京の喉は緊張のあまりからからに渴いていた。

「別に良いけど、…下に加良ちゃん待たせてるんだ」

少し困つた風に笑いながら祀は後方を見る。そうして再び京を見た。その綺麗な顔を見ると、言葉が上手く出て来ない。いやがおうにも緊張が高まり、手に汗が滲んだ。訝しげな祀の視線に、やっぱり良い、と口から出てしまいそうになる。

しかし、加良の声が蘇つた。

『しつかりとやるのよ！』

京は大きく深呼吸をし、1歩祀に近寄る。京の緊張が伝わつたのか、祀の喉が息を飲み込むのが見えた。

「俺、王子と加良ちゃんに嘘を吐いた。まず、それから謝らせてくれ。ごめん」

京の言葉に、祀はぼかんとする。

「…嘘つて？」

やっぱり訝しげな顔をし、祀は聞き返した。

「俺、加良ちゃんの事好きだつて、言つたよな？」

祀は少し考えた後、ちよつと表情を曇らせながらもこくん、と頷く。

「あれ、嘘なんだ」

一瞬の間、祀の眉間に皺が寄つた。

「…それ、どういう意味？…返答次第では、僕、京を殴つてしまつかもしれない」

声のトーンを少し下げた祀からは怒りが滲み出ている。友達思いの

男なのだ。

この嘘がどういふ物なのかわかっていいるから、親友の加良の事を思い怒っているのだ。

そんな熱い所も堪らなく大好きで、怒りが自分に向いていると解っているけれど自然と頬が緩んだ。

「京？」

「好きだ」

呼びかける声に被せるように言う。

「…え？」

聞こえなかったのか、聞き返してくる祀に今度はゆっくりと告げた。「ずっと好きだった、王子の事が…祀の事が」

初めて名前を呼ぶ。怒りに満ちていた祀が、ゆっくりと言われた事を消化し意味に思い当たると、今度はその綺麗な顔を赤に染めた。

「男を好きになるなんて思わなくて、でも気持ちを止める事ができなくて祀に近づきたい一心で嘘を吐いた」

じっと祀の目を見詰めながら伝える。祀の瞳には大粒の涙が浮かんだ。

ぼろぼろと零れ出した涙が陽に当たり、その頬をきらきらと輝かせる。京は更に祀に近づき、そつとその頬に触れた。

「つく、加良ちゃんは…」

涙で震える声は何を言いたいのか解っていた京は急いで答える。

「俺の嘘も、気持ちも知ってる」

京の告白に、もう堪えられなくなっていた祀は、両手で顔を覆いその場にしゃがみ込んでしまう。

「…そんな…だっ…」

涙の合間に苦しそうな言葉が紡がれ、京は切ない気持ちを隠せずに小さくなった祀の身体を抱きしめた。

ぽんぽん、と薄い背中をあやす様に叩くと、祀の嗚咽は更に大きくなる。

「…大丈夫、加良ちゃんは全部知ってて俺の背中を押したんだ。笑

いながら、しっかりとやるのよって……」

笑いを含ませながら伝えると、漸く涙を拭い始めた祀も小さく笑う。

「加良ちゃんらしいや……」

そう言った祀が、より一層愛おしくて抱きしめていた腕に更に力を込めたのだった。

事件

2人の姿を見てみると加良は幸せな気分になる。

お互いを思いやり、初々しいまでに“お付き合い”を始めた2人は、しかし加良を1人にはしなかった。

学園に居る間は勿論、休みの日に何処かに行くにも加良を誘う。初めのうちはそれ程気にならなかった加良だけれど、一月、二月と時間が過ぎて行くうちに、やっぱり可笑しいと感じ始めていた。

今日もやっぱり3人で昼食を摂っている。目の前で楽しげに語らっている祀と京を眺めながら加良は溜息を吐いた。

「加良ちゃん？どうしたの？」

加良の溜息にいち早く気が付いたのは祀だった。ふっと再び溜息を吐き、祀と京の顔を交互に見る。

「加良ちゃん？」

今度は京の心配そうな声があった。

「お2人とも、楽しい？」

ちよつとあきれがちに尋ねてみると、京の表情が曇る。どうやら加良の言いたい事が解ったようだった。しかし、祀は小首を傾げるのみだ。加良は三度溜息を吐き、解っていない祀に視線を向けた。

「あのね、私も馬には蹴られたくないのよ」

曖昧な表現を試してみる。京はその鋭いまでの一重の瞳を苦笑に揺らした。

それでも祀は解らないらしい。白い、綺麗な顔を困惑に歪め加良を見詰めた。

まったくもって鈍い祀。それも彼の魅力ではあるけれど、流石に京が可哀そうだ。

「ですから、なんで私も一緒なの？祀くんも本当は京くんと2人で居たいはずだわ。私に構わずに2人で居て良いのよ？」

はつきりと口にする、祀の白い頬が赤に染まった。それでも加良

は止めない。

「いい？ やつとお2人は恋人同士になれたのよ？ 恋人なら、それなりにやりたい事だってあるはずだわ。それなのに、私なんかと一緒にいたら、出来る事も出来なくなるわ」

不躰な言葉に祀の表情は更に赤に染まり、口を鯉のようにぱくぱくとさせている。慌てたように京が口を挟んだ。

「俺はこのままでも充分だよ、加良ちゃん」

いつもはきりりとしている眉を垂らした京に、加良は眉間に皺を寄せる。

「そんなはずないでしょう？ 京くんは本当にこのままでも良いの？！」

ちよつときつめに言うと、京はそれ以上何も言わず祀に視線を向けた。祀は小さな唇を噛むと、視線を上げ加良を睨むように見る。そうして苦しそうに口を開いた。

「…僕は加良ちゃんの親友だ。加良ちゃんとも一緒に居たい。それに…」

そこで言葉を止めた祀に加良は先を促す。

「それに、何？」

祀は視線を下げ、小さな声で言った。

「加良ちゃんには僕しか居ないだろ…？」

祀しか居ない。

とは案に加良には友人が居ない、と言っているのと同じだった。

やっぱりそれか。と思う。確かに加良には祀以上の友人は居ない。

それはずっと2人で居たからだ。

自分もいけないのは解っているけれど、でもそれでも良いと思ってた。…最近までは。

しかし、それではもういけない。

祀には、加良よりも大切にしなければいけない存在が出来たのだ。

なのに、今までと同じなのはやっぱり可笑しい。加良にも決断せねばならない時期が来たのだ。

祀離れをしなければいけない時期が…。

加良は下唇を噛みしめると深呼吸をし、きつと視線を上げた。

「そんな事、ないわ。私にも友人は居ます。勿論、祀くん以上の友人ではないけれど、だから寂しくはないわ?」

本当は凄く寂しい。

幼い頃から横に居るのが当たり前前で、まるで双子のように過ごしてきたのだ。

それでも、祀の横は京に譲らなければならない。

「加良ちゃん…」

悲しそうな祀の声が聞こえる。

祀離れをしなければならぬ。

加良はとびつきりの笑顔を浮かべ、悲しい顔をしている祀を抱き締めた。

「大丈夫。祀くんにとって私は2番になってしまったけれど、私にとっては祀くんが1番よ?…京くんは2番」

祀の横で苦しそうな表情をした京が見えて、加良はまた笑顔で告げる。

「ごめん、加良ちゃん…」

京と祀の謝罪の声が重なった。

永遠の別れではないのだ。だから謝ってほしくはない。だけれども、片割れを無くしてしまった寂しさに浮かんだ涙は隠せそうにもない。加良はうつすらと浮かんだ涙をそのままに、輝くような笑顔を浮かべたのだった。

「…でも、たまには一緒に居てね?」

2人と少し距離を取るようになった加良にも、友人、と呼べる位の人が出来た。

「加良!」

昼休みになると、必ず迎えに来る。祀が苦笑を浮かべながら、その

姿を見ているのは知っていた。

かわさき
川崎 雛奈。ひな

本学園の生徒会に所属しており、スポーツ万能、成績優秀、そうしてモデルの様な容姿の持ち主であった。しかし、その性格は男勝りのそれで女生徒のファンも多くいる。

そんな雛奈が、突然一人で居る事が多くなった加良に声を掛けてきたのだ。

「桜小路さん。最近一人だけど彼と喧嘩でもしたの？」

教室にぽつんと居た加良の横に腰を掛け、日向の様な笑顔を浮かべたのだった。

「雛奈さん！お待たせいたしました」

お弁当を下げ、ちよつと小走りに近づくと苦笑を浮かべられる。

「別に待ってないよ。それから、雛奈、で良いのに」

そんな事を話しながら教室を後にした。

足の長い彼女に付いて歩くのは結構大変である。加良は足を速く動かし、雛奈に付いて行く。そんな加良に雛奈は視線を送った。

「絢世、大丈夫だったの？」

それが先程の事だと解っている加良だったが、知らぬふりをする。

「祀くん？何かあったかしら？」

そんな加良に、雛奈は肩を竦めるだけで何も言わなかった。

噂好きな奴は居るものだ。

なるべく祀達と一緒に居る時間を減らしていた加良の耳に、恐れていた噂が飛び込んで来たのはもう直ぐ12月になろうとしていた時だった。

「加良、私変な噂を耳にしたんだけど…」

それをもたらしたのは雛奈だった。何時もは何でも任せなさい、と言ったふうに堂々としている雛奈が、眉間に皺を寄せながら加良を誰も居ない踊り場まで引つ張って行く。

既に1日の授業は終わっていて、帰ろうとしている生徒や部活動へ行こうとしている生徒が慌ただしくしているのを横目に、加良は口を開いた。

「変な噂…?」

恐る恐る、といったふうに聞き返すと、雛奈は一旦口を閉ざす。その意思の強そうな瞳が加良を捉えていた。そんな雛奈の態度が、加良の胸に寒い物を運んで来る。

得体の知れない不安を抱えながら、加良は続きを促した。

「絢世と石和が…、その…怪しいってやつ…」

言い淀みながらも伝えられた言葉に困惑する。

怪しい、とはどういう意味なのか。加良は困惑気に首を傾げた。

「だから、あの2人が…“できる”って噂…」

加良の耳に血の気が引く音が響く。

いくら自分が理解していても、周りがそうとは限らない。それは嫌という程加良達は解っていたから、それはもう気を使って生活してきた。

学園ではお互いをできるだけ友人、と言う様に扱って来たはずだし、加良も居たのだ。

なのに、噂…?」

そんなはずは無い、と思い加良は雛奈の顔を見た。

「どうしてそんな噂が…?あの2人に限ってそんなはずは無いと思いますけど」

出来るだけ顔が引き攣らないように笑顔を作り、柔らかな言葉に拒絶を含む。

「うん…私もそう思うんだけど、どうも実しやかに噂が流れてるんだよね。加良は何か聞いてないの?」

唯一全てを知っている加良は、しかしここで話す訳にも行かない。

表情を引き締め、小さく首を横に振り、否定の意を告げた。

「そう…。なら良いんだけど。加良から石和と絢世にそれとなく言っただけでいい?」

何を言えと言うのか。
世間には認められない恋を、ひっそりとしている2人に何を…。
守らなければいけない。
2人をくつつけたのは自分なのだ。
何があっても守らなければいけないのだ。
何時に無く厳しい顔をし、加良は頷いたのだった。

あんなに決心したのに…
急がなければならなかったのに…
必死に探したのに…
それは起こってしまった…

雛奈と別れた加良は急ぎ足で2人の姿を探していた。
下駄箱に靴を見に行くと祀の外履きがあり、まだ2人は校舎の中に
居ると思われる。

広い校舎を隅々まで探していた加良に、雛奈の呼ぶ声が聞こえた。
「加良！！」
さつきとは違う怖い表情でこちらに走って来る。
言い知れない不安が加良を襲った。

雛奈の手が加良の腕を掴み、そのまま来た方向に加良を引きずるよ
うにし走り出す。

「ど、どうしたの?!」
驚きながらも足を動かした加良に雛奈の苦しそうな声が聞こえた。
「あの2人、大変なんだよ!!」

まさか…
そんな…

目の前が暗くなるのが解る。そのまま加良は雛奈に引っ張られなが
ら足を進めた。

階段を駆け上がり角を曲がると、加良の目に人垣が見える。上がる息を整えながら人垣に突っ込もうとした加良をぎりぎりで見えなげにきとめた。

「本当に？」

「嘘だろ？」

「だって、男同士……」

人垣から聞こえる声に身体が震えた。

縦るように雛奈を見ると、その顔が厳しい物になる。そうして1点を見つめているのが解り、加良も視線を向けた。

人垣の丁度中心に見慣れた顔が見える。白い顔が、今は青に見えた。

「祀くん……」

震える声で呼び掛けてみるけれど、人垣に掻き消されてしまい、祀には届かない。

どこか虚ろな表情の祀は、学年主任の教師に腕を掴まれていた。そうして、祀の背後にある空き教室の中から大きな音が響く。更に怒鳴り声が聞こえた。

「うるせー！放せよ！！」

京の声だった。

「祀を何処に連れてくんだ！！おい、祀！！……まつりー！！！！」

悲痛なまでの声に、加良は飛び出し雛奈の止める声も無視して人垣をかき分ける。

「祀くん！」

無表情の祀に縋り付くようにして声をかけるも、反応が無い。

その時、加良の耳に何かがぶつかる大きな音が聞こえた。空き教室の中からだ。そうして京の叫び声が聞こえる。

「祀！！！！」

ぱつと、祀の顔を見ると悲痛な表情がそこにあった。そうして震える小さな声が木霊する。

「……加良ちゃん……助けて……」

刹那、加良は動いていた。祀を掴んでいる学年主任の身体に小さな

身体をぶつける。

不意打ちだった為よろけた教師を尻目に祀の腕を掴むと、そのまま空き教室の中に飛び込んだ。

「祀！…加良ちゃん?!」

京は別の教師2名に身体を押さえつけられていた。加良は勢いそのままに祀と共にその教師めがけて動き出す。

しかし、そこまでだった。

祀は再び学年主任に、加良は駆けつけた別の教師に羽交い締めになされ身動きが取れなくなる。

力の限り暴れてみるも、びくともしなかった。

そのまま引きずられるように加良と祀は教室の外に連れ出される。

2人の耳には京の切ない呼び声が木霊したのだった。

別離（わかれ）

「2人が何をしたと言っんですか！」

震える身体に鞭を打ち、加良は声を上げた。

ここは職員棟の一室だ。引きずられるようにして連れてこられ、加良は閉じ込められている。駆けつけた教師と加良の2人きりで、祀の姿も京の姿も見えなかった。

「桜小路、少し落ち着け。時間がくれば学園長に呼ばれる」

苦虫を噛み潰したように顔を顰めながら言っと、そのあとはダンマリだった。

加良は悔しさのあまり、鼻の奥が痛くなる。

しかし、涙等見せるかと思ひ、唇を噛みしめた。

どの位の時をそうしていたのか、加良には見当もつかない。

イライラが絶頂に達した時だった。教室の扉が開かれる。そこに立っていたのは学年主任だった。何時になく厳しい表情で教師に耳打ちすると、今度は加良を見据える。

加良は負けないように、その視線を受け止めた。

「…桜小路、来なさい」

厳しい声に、けれど加良は前を向き無言で歩き出す。その姿に両教師は小さく溜息を吐いた。

教室を出ると、可笑しな位辺りが静かで笑ってしまう。

廊下の突き当たりにある学園長室の前に着くと、加良は深呼吸をし扉を開いた。

ぴしっとしたスーツに身を包んだ学園長が、他の教師同様厳しい顔で座っている。加良は一礼をし歩みを進め、重厚なデスクの前まで行き学園長の顔を凝視した。

「…なぜ呼ばれたのか分かりますか？」

静かな声だったが、何処か困惑が含まれている気がする。呼ばれた理由はなんとなく分かっていたが、敢えて分からないふりをした。

「いいえ、分かりかねますが」

学園長の目を見ながら、はつきりと答えてやる。挑発的な言葉に聞こえたかもしれない。斜め後に立っていた学年主任の焦った声がした。

「おい！桜小路！」

しかし、そんな声に答えてやるつもりは毛頭ない。加良はじっと学園長を見つめた。

「桜小路さん。君があの場所であるのように暴れたという事は、あの2人の事を知っていた、と受け取って良いのかな？」

含みのある言い方に力チンと来た加良は、ぎゅっと拳を握る。自分の爪が食い込み、鈍い痛みが広がった。

「知っているから、だから何なんです」

許されない恋だからといって、応援してはいけないのか。

2人は加良の親友なのだ。親友を助け、親友を想ってはいけないのか。

同姓同士の恋は、そんなにいけないことなのか。

「彼らは、退学になります」

学園長はさらりとそんな事を告げた。一瞬何を言っているのか解らなかつた加良は眉間に皺を寄せ聞き返した。

「え？」

「ですから、退学になります」

“退学”の所を強調し、学園長は加良を見る。学園長の言葉が耳に届き、その言葉の意味を理解すると、身体が勝手に動き出した。

「彼らが何をしたって言うんですか！！」

殴りかからんとする加良を、学年主任が背後から抱えるようにし引き留める。学園長はゆっくりとした動作で、デスクの上で両手を組んだ。

「学園の調和を乱した為です。∴彼らは自主退学という形を選びました」

学園の調和。

そんな事の為に彼らは居場所を追われなければならないのか。悔しさと憤りを感じ、加良は唇を噛み締める。口腔内に鉄の味が広がった。

「桜小路さんはどうしますか？」

こんな学校辞めてやる。

そんな言葉を吐き捨てようとする、学園長は更に言葉を綴った。

「彼らは、桜小路さんは関係ない、と言っています。…教師に暴言を吐いた、と言う事で1週間の謹慎処分とします。1週間しっかりと考え、進退を決めなさい」

“関係ない”…？

どうして、そんな事をあの2人が言ったのか分からない。

関係ない筈は無い。

だって、2人をくつつけたのは…。

そこで思考が止められる。自分を抑えていた学年主任がそつと加良を促したのだ。

その手を振り払い、学園長を1度きつく睨むとそのままの勢いで部屋を出た。

拳を握り締めると、思った以上の痛みが走る。

見ると手の平に血が滲んでいた。

家に着くと母に携帯を奪われる。その眼がとんでもない物を見るかのように揺らめいていた。

血の滲んだ手をもう一度強く握り、部屋に駆け込む。

その後加良は両親から軟禁を言い渡され、外部とは一切連絡する事が出来ずに2週間という長い時間を泣きながら過ごした。

窓から差し込まれる日差しが、以前であればとても気持ち良く見える空の青もどこか曇って見える。

あんな学園には2度と行きたくはなかったけれど、今の加良には2人の事が気になりそうして“その後”を知る術は学園しかなかった

のも事実で…。

加良は2週間ぶりに袖を通した制服を睨みつけ、相変わらず壊れ物でも見るかのような両親からの視線を払い除け、外に足を踏み出した。

加良が学園の敷地に入ると、あちらこちらから好奇心な視線を浴びせられる。以前は友好的だった同級生も遠巻きに加良を見るだけだった。

居た堪れない物を感じながらも負ける訳にはいかない加良は、キツと視線を前だけに向け歩みを進める。その視線の先に、長身の女生徒の姿を捉えた。

他の生徒に囲まれるようにして歩いている。それは雛奈だった。

加良はゆっくりと歩みを進め、すれ違いざまに声を掛ける。

「ごきげんよう」

まるで感情の籠っていない声に、掛けられた方は一瞬戸惑うような表情をし、その言葉が加良からの物だと解ると複雑な表情を浮かべた。それを一瞥しながら加良は歩みを止める事はなく、そのまま進む。

そんな加良の腕を突然掴む者がいた。加良は仕方なく足を止める。

「加良！」

雛奈の声に、腕を掴んでいるのが彼女だとしれて、面倒臭かったけれど振り返る。

「…」

無言で相手を見ると、その知的な瞳には涙が浮かんでいた。

しかし、心を閉ざしてしまった加良にはその涙が解らない。少しの間、雛奈の言葉を待ってみたけれど何も言わない為、手を振り解こうとした。その瞬間、加良の手に何かが当たる。雛奈は何も言わずにその物を加良の手の中に握らせると、手を放し加良の身体を抱きしめた。

「…私は、あなたの味方だから」

そっと伝えられた言葉に、少し、ほんの少しだったけれど、凍りつ

いた心が解れたように感じた。
抱擁が解かれ、呆然とする加良をそのままに雛奈は歩き出す。
その背中を一旦見、ゆっくりと視線を動かすと手の中に、小さな紙
が有った。その紙を開くと見覚えのある字が迎える。文面を見、加
良はその紙を握り締めると駆けだしていた。

周りの視線が加良に絡み付く。
煩わしい、と少し思うけれど今はそんな事どうでも良い位急いでい
た。

高等部の図書室に駆け込んだ加良は、記憶にある分厚い本を探す。
一番奥の棚に、他の本よりほんの少し手前にずれているやつが見え
た。背表紙には“フリーペーパー”と書かれている。

加良は逸る胸を押さえながら、ゆっくりとその本を手にした。
雛奈から渡された紙には几帳面な祀の文字が綴られている。短い文
には『あの本を見て』と書かれていた。

あの本とは、多分この本のはず。加良は震える手を何とか抑え、本
の表紙を開いた。

そこには、綺麗な色の便箋が丁寧に折り畳まれ挟まれている。本を
元に戻し、図書室に設けられている椅子に腰を掛けるとその紙を慎
重に開いた。

『加良ちゃんへ』とやっぱり几帳面な祀の文字が目に入る。
ゆっくりと文字を目で追い、何時の間にか加良の瞳には涙が浮かん
でいた。

便箋には、加良への謝罪とお礼、そうして祀と京の“お願い”が記
されていたのだ。

流石は祀、といったところか。
幼馴染で、誰よりも一番近くに居た祀は、加良の性格を熟知してい
たようだ。

しっかりと強い思いが記されている。

加良の瞳から耐えきれずに落ちて来た雫で、少しばかり滲んでしまった文字が訴えていた。

「…わかったわ、祀くん…」
便箋を抱き締めながら、加良は小さく呟いたのだった。

あれから、2年と少しの時間が流れた。

加良は今大勢の生徒の前に立ち、卒業生代表として答辞を述べている。

あの事件を詳しく知らない下級生からは、その容姿もあつて随分と人気物だった。

けれど加良は一線を引き、けして仲良くはなろうとしなかった。

ある意味針のムシロだった加良は、それでも学年1の成績を収め、今こうして壇上に立っている。

予め用意されていた原稿を途中まで読み上げた加良は、一つ息を吐きその原稿を破り捨てた。一気にその場が騒然となる。教師たちも驚きを隠せず、俄かに騒ぎ出した。

そんな中、加良の凜とした声が響き渡る。騒然としていた場が、一気に静寂に包まれた。

「…私には幼い頃よりずっと一緒にいた人物と、高等部へ上がった時に出会った人物と2人の親友がおりました。彼らは私にとって誰よりも、何よりも大切な存在でした。しかし、そんな2人を1年の3学期に失ったのです」

一旦言葉を止め、教師達を見る。学年主任が顔色を無くし、何かを周囲の教師達に耳打ちしていた。壇上から降ろされると思った加良は、再度視線を上げ、マイクに向かう。

「“学園の調和”…そんな物の為に、彼らは居場所を奪われ私から笑顔を奪いました。こんな学園、直ぐにでも辞めたかった。だけれど…」

俄かに壇上へ上がる階段前が騒がしくなる。教師達が加良を降ろす

為に駆けつけたのだ。覚悟を決めた加良の瞳に驚く光景が見えた。卒業生の列から数名の生徒が駆け出し、壇上へ上がろうとしている教師を止めていたのだ。その中に雛奈の姿が見える。

雛奈は学年主任の腕を掴みながら加良を振り返ると

「加良！続けて！！」

声の限りに叫んだ。

あの出来事があった後、加良は回りの人間と距離をとってきた。それは雛奈にも同様で、まさかこんな風に助けてくれるなんて思わなかった。

あの時“あなたの味方だから”と言ってくれたのは本心からだったのだと知れる。

加良は力強く頷き、マイクを掴んだ。

「彼らは私にメッセージをくれました。“どんな事があっても卒業してくれ”と…。その言葉を胸に頑張ってきました。…これで漸く自由になれる。皆さんも今一度考えて下さい。こんな学園で良いの？！」

加良は大きく息を吐き、深々と礼をすると騒ぎの中に飲み込まれていった。

階段を降りると、学年主任の怖い顔が出向かえる。加良は小さく鼻で笑い、そのまま講堂を後にしたのだった。

祀（前書き）

ここからは、祀目線のお話です。

ご容赦あれ、m（――）m、

祀

加良に、あの手紙は無事届くだろうか。

京と決めたメッセージは、今の2人の思い全てだった。

自分があの時“助けて”と言わなければ、加良が巻き込まれる事はなかったはずだ。そんな事はわかっていたはずだったのに、何かに縋りたくて言葉を発した。

その結果が、祀と京は退学。加良は1週間の謹慎となったのだ。

責任感の強い加良だから、きつと2人が退学になったのは自分のせいで、守れなかったせいと思ってしまう。そうして自分も辞めてやる、と思うはずだ。

なんとしてもそれは避けたかった。

親友の加良を自分たちと同じ辛い道に誘うのは避けたかったのだ。

幸い、加良を守ってくると約束してくれた人物もいる。

なんとその人は、連絡手段を絶たれた祀と京のパイプにもなってくれる、という。

藁にも縋る思いで其れを受け入れ、今祀は東京の外れにある都立高校に通っている。

緑豊かなその高校は、通っている生徒も心豊からしく、有名私立から急遽転入してきた祀にも優しく接してくれた。

幸いにも都立なのに寮という物が存在していて、祀はそこから通っている。汚い物を見るかのような両親の視線からも逃れる事が出来るから…。

教室の窓から見える緑が風に揺れ、ささくれだってしまう心も風いで行くようだった。

「絢世くん、お手紙が来ていますよ」

学校から寮に戻って来た祀に寮母が声を掛ける。その手紙が誰からなのか察しが付いていた祀は、受け取った手紙を大切そうに胸に抱えた。

「毎月来るわね、手紙。差出人はいつも決まっている子よね？絢世くんの彼女かしら」

ふふ、と笑いを含んだ寮母の言葉に曖昧に頷き、祀は急いで自室に戻った。

鞆を机に置き、備え付けられているベッドに腰を降ろすと、綺麗な水色の封筒を見詰める。封筒をひっくり返すと、何時もの名前が『川崎 雛奈』と記されていた。そう。

加良の友人だ。

凜とした姿を思い浮べ、感謝の気持ちを胸にしながら水色の封筒を切った。

その中から、小さなメッセージカードと一回り小さな封筒が出てくる。まずメッセージカードに目を馳せた。

『絢世くん、お元気ですか？』

加良は相変わらず人を遠ざけ、怖い顔を崩そうとしていません。

早く、少しでも早く傷が癒え、受け入れてくれるといいんだけど…。

あなたとの約束は絶対に守ってみせるから、だから心配しないでね。

いつものように、例の物同封しておきます。

雛奈

加良の近況に涙が浮んだ。

あの小さな、けれど芯の強い加良が、どれだけ心細い想いをしているのか検討もつかないけれど、今は雛奈に任せるしかないと解っているから祀は浮んだ涙を拭い、同封されていた封筒に手を伸ばした。綺麗な藤色の封筒の封を切る。

自分の手が少し震えているのが解って、綺麗な顔を苦笑に歪めた。慎重に便箋を引き抜き、綴ってある文字を目で追って行く。男らしい文字は、愛しい人の近況を伝えてくれる。

何度も読み返し、最後に綴ってある『京』と言う文字を愛おしいそうに撫でた。

「京……」

自然と口から零れた名前に、閉じた瞼の裏でその姿を探す。浮んだ姿は変わらず男らしく、そうして祀を優しく呼ぶ。止まっただけの涙が溢れ、祀は小さく嗚咽を零したのだった。

どの位そうしていたか。

ふと涙を拭った祀は徐に動き出す。机に備え付けられた引き出しを開けるとシルバーの箱が目に入った。その箱を開けるとこれから行う作業に必要な不可欠な物が入っている。

祀は慎重にそれらを出した。

京は今、東京にはいない。

少し遠くの県で働いているのだ。

祀は手紙を書く為に机に向かい、開いた便箋に文字を綴った。

新しい学校の事、親の事、そうして加良の事。色々な事を書きそうして想いを伝える。

本当は逢いたい、と書きたいけれど許されない事だから文字には出れない。ただ好きだと、愛していると綴り封をした。そうしてメッセージカードに今度は雛奈に宛てて文字を綴る。

短い文面を読み直し、少し大きめな封筒に入れ封をした。

この学校に来てから毎月1度行われる作業。

唯一京と繋がっていられるこの作業が、今の祀には何よりの心の支えだった。

初夏が深まり、暑い夏を越えあつと言う間に木々の葉が色付き始めた10月、この学校は修学旅行を迎える。

行き先は沖縄。

その事実を知った時、祀は驚愕した。
沖縄。

それは、あの精悍な男らしい、愛おしい人が居る場所だった。
逸る気持ちを抑えながら、雛奈への手紙に伝えたのは1学期が終了する時だった。

翌月来た手紙には、逸る気持ちが丸出しの男らしい文面で『逢いたい』と記されている。

祀は勿論逢おうと伝えた。

2学期が始まり旅行の日程が徐々に決められていく。

緩い校風なこの学校は、旅行に関しても自由行動が多く祀には好都合だ。

決められた時間にホテルに戻ってくれば、1人で出かけても良いと言う。前の学園では考えられない事に、思わず苦笑を零した程だ。
宿泊するホテルは那覇市内になると言う。

全てが決まった時、祀は嬉しさの余り叫びたい思いだった。
そうして迎えた修学旅行。

沖縄の地の足を踏み入れると、10月だというのに温かい気候に類が緩む。おまけに京に逢えるのだ。期待に膨らんだ胸を押さえて、団体行動に向った。

初日は大型バスで姫ゆりの塔や満座毛などの地を回る。クラスメイトと記念撮影などを行い夕食を頂くと、やっと1人の時間が持てた。あの事件以来携帯電話を持たせてもらえなかった祀は、テレフォンカードと紙切れを手にホテルの公衆電話に向う。ゆっくりと紙を見ながらボタンを押し、恐る恐る受話器を握った。

数回のコールで通話が繋がる。受話器の向こうから、凜とした女性の声が聞こえた。

『はい』

雛奈の声だ。

「もしもし、絢世です」

一呼吸置き伝えると、雛奈は緊張を解いたように声を和らげる。
一通り挨拶やら近況等を伝えると、雛奈は改まった声を出した。
『いい？良く聞いてね』

前置きに少なからず緊張を強める。

『時間は11時で大丈夫なのよね？』

確認の言葉に返事をすると、京との待ち合わせであるビーチの名前が告げられた。

『大丈夫だと思うけれど…2人とも慎重に、気付かれないようにね』
雛奈の忠告に素直に頷き電話を切った。

明日の午後には京に逢える。その事を思うと自然と頬が緩んだ。

「では、今日は自由行動です。皆さん地元の方とトラブルにならないよう注意して行動して下さい。夕食は午後6時30分からです。それまでにはホテルに戻るように！では解散！！」

担任の声に、俄かに周りが騒がしくなる。そうして“解散”の言葉に騒がしさは喧騒に代わった。クラスメートは仲の良い者同士が話し合いを始める。祀はその喧騒を利用し、そつとその場を後にした。腕時計を見時間を確認する。時計は10時を指していた。

京との待ち合わせであるビーチの場所を地図で確認し、タクシーを捕まえようとした時びくりと身体が硬直する。

「おい！絢世！！」

突然声が掛かったのだ。冷や汗が背中を伝い、鳥肌が浮ぶ。

「絢世？」

もう1度呼びかけられ、祀は仕方なく振り返った。

其処にはクラスメートであり、学級委員長である はやま 葉山 みぞ 操が立っていた。こちらの反応を訝しげに見ながら近づいて来る。ここではれたら拙いのに、逃げなければいけないのに1歩が踏み出せない。震える手をギュッと握り祀は彼の顔を見た。

「…大丈夫か？今にも死んでしまいそうな顔してるけど」

目の前に立った長身の操に絶望を覚えた祀は、持っていた地図を落としてしまいそうして泣き崩れる。操の顔が驚きに変わったのを目の端で捕らえたけれど、これでもう京に逢えないと思った祀は、そのまま顔を手で覆った。

どの位の時間が経ったのか。頭上から操の声が降ってくる。

「…ここに行こうと思ったのか？」

その言葉に顔を上げると、落としてしまった地図を操が見ている所だった。その視線が地図から離れ祀に向けられる。応える事が出来なかった祀は、涙をそのままに操の顔を眺めた。操の男らしい顔が何かを思案した後、再度祀を見る。そうしてその男らしい顔を笑顔に変えたのだった。

一歩踏み出し道路の端に立つと、手を上げる。通行量の多い国道では容易にタクシーは捕まり、黄色い車体が金属音を響かせながら祀と操の前で止まった。

操は、ぽかん、としている祀の腕を掴むと強引に立たせる。そうしてタクシーの中に押し込んだ。そのまま自分もタクシーに乗り込むと、運転手にビーチの名前を告げた。

タクシーはゆっくりと発車する。祀は恐る恐る操に声を掛けた。

「…葉山くん…？」

困惑気な祀の声に、葉山は笑顔を向ける。

「泣き止んだか？」

言われて気まずい物を感じた祀は視線を自分の膝に落とした。そんな祀の頭に大きな手が乗せられる。

「基本単独行動は拙い。ばれたら何言われるかわからないしな。だけど、俺も行きたい場所があるんだ。俺と絢世2人だったら問題は無い。だから一緒に行動していた事にしよう。な？」

そんな言葉に祀は驚いた。急いで顔を上げると操の真剣な眼差しが出迎える。

「ただし、ちゃんと説明しろ。それが条件だ。…大丈夫、俺も説明するから」

本当にこの人を信用して良いのか解らない。解らないけれど、今の祀には信用するしかなかった。緊張でからからに乾いた喉を持つていた飲み物で潤し、そうして祀は以前の学園で起きた事を操に説明したのだった。

「ああ、絢世！これ」

無事にビーチの入り口に着くと降りるよう言われた祀は、足を踏み出す。そうしてお金を渡そうと財布を出していると操の男らしい声が聞こえた。急いで顔を上げると何やらカードらしき物を渡される。

「俺の携帯番号。用事が終わったら連絡くれ。帰る時も一緒じゃないと拙いからな。それじゃ…上手くやれよ？」

にやりと笑った操に気圧され、お金を渡す前に扉が閉じられてしまった。そのままタクシーは発進してしまう。

颯爽と去った操の姿にお礼を込めて一礼した祀の耳に、懐かしい声が聞こえた。

「…祀…」

夢にまで見た愛おしい声。

夢ではない、と思うけれど振り返ったら消えてしまいそうで怖い。

あの日を最後に逢う事も許されなかった2人が、今、再会を果たそうとしていた。

波の音が、2人を包んだ静寂を震わせる。

「…祀？」

何時までも振り返らない祀に業を煮やしたのか、少し強い力で細い肩に触れた京を衝撃が襲った。

浮かんだ涙を隠すように京の胸に顔を埋める。震える身体を京の大きな腕が優しく包んだ。

「祀…逢いたかった…」

包んだ腕に力を込め、そっと囁く京の声も涙に濡れていて、どれ程

お互いを恋焦がれていたのかを物語っている。

祀は震える腕を動かし、幻ではない京の背に腕を回しその体温を堪能する。顔を上げると日本人離れた端正な顔にある一重の瞳が、祀に向けて優しい眼差しを落としていた。

どちらからともなく顔を近づける。そうして、久方ぶりの口付けを交わした。

ゆっくりと陽が傾いて行く。

波の音を聞きながら、京の体温を感じるとそれだけでうっとりとする。

お互いに、逢えなかった分色々と言った。

勿論加良の事も…。

「加良ちゃん…やっぱりまだ駄目みたい。僕達の想い、逆に彼女を苦しめてるのかな？」

ずっと心苦しかった事をぽつりと呟いてみる。京の顔は一瞬苦渋に満ちたけれど、直ぐに笑顔に変わった。

「…彼女は強い。あの状況でも俺達を守ろうとしてくれただろ？あのまま彼女が退学していたら、彼女まで悪者になってたと思う。それは違うよ。…今は、加良ちゃんの強さを信じるしかない」

それでも曇る祀の表情に、京は力強い笑顔を向ける。

「大丈夫！加良ちゃんは1人じゃない。影からでも支えてくれる川崎さんがいるんだから。だから俺達がそんな顔してたら失礼だよ。

今は信じて前を向いて行こう…。」

そうなのだ。

今は信じるしかない。

川崎の力を信じて、前を向いて行く。

祀は1つ息を吐き、1人の時間考えていた“今後”の事について口を開いた。

「僕、大学に行くよ。そうして、誰にも文句を言わせない程になる。

だから、大学を卒業したら：“此処”に来てもいい…?”

決意とは裏腹に、最後は小さい声になってしまふ。この決意は、つまりそれまで京には逢わない、という事も含まれているから…。ぎゅっと瞑った瞳から熱い物が溢れそうになる。それを京に悟られたくなくて下を向いた。

はあ、と横で溜息がする。

京に捨てられるかもしれない。でも、決心をかえるつもりはなかった。

「まったく…」

呆れた様な、そんな苦笑が交じった声がした。

「1」

「先に言うなよ」

ごめん、と続く筈だった言葉は、京のおちゃらけた声に掻き消される。

え？つと思いい顔を上げた祀の瞳には優しい京の笑顔が映った。

「5年かあ…。きっと直ぐだよな？」

海を見詰めていた京の視線が祀に注がれる。

5年。

きっと直ぐではないけれど、でもこの気持ちはなくなる筈だ。

其れは祀だけではなくて、京も同じ筈。

きつと待てる。

絶対に待てる。

だって、親友が、加良が懸命になって守ろうとした想いだから。

涙に滲む海を眺めながら、祀は小さく頷いたのだった。

京

親は結構さっぱりとしていた。

学園に呼び出されても堂々としていて怯む様子はない。

京の母は、16で彼を産み1人で育てて来たのだ。肝っ玉が据わっていて当然だった。

まるで掴み掛かってくるかのような剣幕でわめき散らす祀の母親に對しても、

『恋愛は自由でしょ？まあ、まだ未成年だからしかたないけど、成人したら今のようにはいかないよ』
と言いつつ放った。

そうして京に對しても

『今は我慢しな。20歳になったら好きにすれば良い』

そう言いつつ颯爽と歩いたのだった。

違う高校に行く事は止めた。

何時か祀を迎える時、自由になる金がないのは良くないと思い働く事を決意する。

年中暖かい沖縄なら体調を崩すことなく働けると思い、友人のつてを頼り海を渡った。

目前に広がる海を眺めながら思うのは祀と加良の事。

そうして、あの手紙は無事に加良へと渡っただろうか…、と思った。

川崎 雛奈に託した手紙。

彼女を信じて良いのか解らなかったが、他に頼る術もない。

自分たち2人を繋ぐパイプにもなってくれと言っていたから、信じるしかなかった。

そんな事をつらつらと考えながら、京は慣れない土地での仕事に精を出していた。

元来身体を動かす事を苦と思っていなかったから、仕事には案外早く慣れたと言える。

まだ3月だけねどぼかばかと暖かい陽気にも、なんとか身体が慣れ始めていた。

朝から晩までみっちり働き、那覇市のボロアパートに帰って来るのは夜8時頃。今入っている現場は、那覇から随分と遠い為時間がかかってしまうのだ。更に夕方の帰宅ラッシュに阻まれる為、余計に遅くなる。

やっとの思いでアパートに辿りついた京には、1つ、とても大切な儀式があった。

それはアパートの郵便受けを見る事。

京と祀を繋ぐパイプからの物を待っているのだ。

毎月1度来るその物が、今の京には何よりも楽しみだった。

郵便受けに、綺麗な水色の封筒が入っているのが見える。京は嬉々としてそれを手に取った。大切そうに握りながら部屋に入ると、急いで封を開ける。

まずは雛奈からの簡単なメッセージカードに目を通す。

加良の現状等が綴られており京の臉の裏に小さく美しい、腰まである長い黒髪を風に揺らし優雅に笑う姿が浮かんだ。あの少女はどうしているだろうか…。

そんな事を思いながら、同封してあった別の封筒を手にする。それは綺麗な薄緑色の封筒。

ゆっくりと封を切り、中の物を取り出した。

几帳面な祀の文字が其処に綴られている。京への熱い、愛おしい想いが入っていた。

今唯一自分たちを繋ぐその手紙をじつと眺めそうして京は眠りにつくのだった。

そんな毎日を送っていた京に歓喜の時が来たのは、7月を迎えたある日だった。

いつものように仕事を終えボロアパートに辿り着くと郵便受けを開

ける。其処に綺麗な水色の封筒を発見し、京は急いで部屋に入った。慎重に封を切り中にある文字を追って行く。そうして京はあと少しで喜びの雄たけびを上げる所だった。

祀の手紙には10月にこの沖繩に来ると言う事。どうやら修学旅行らしい。

京は急いでペンを取り、藤色の便箋に逢いたいとの想いを綴った。祀が来る。

今までの中で一番愛した、愛おしい人が来る。

あの綺麗な顔を想い浮かべて、殺風景な部屋に申し訳程度に置いてある卓上カレンダーを10月まで送ったのだった。

がむしゃらに働いた。

目標があつたから、夏休みなんてものもとらずに肌がまっ黒になるまで働いた。

そうしてあつと言う間に10月を迎え、京は逸る気持ちを抑えながらテレフォンカードを握り締め、ボロアパートより1番近い公衆電話に向かった。

携帯なんて物は持っていない。そんな物に金を使うなら1円でも多く貯金したかったのだ。

飲み込まれるカードを確認し、雛奈からのカードに記されていた携帯の番号を押す。数回のコールの後受話器から凜とした彼女の声が聞こえた。

『はい』

一呼吸置き

「石和だけど」

と伝える。雛奈の声が柔らかいものになり、お互い近況を報告しあつた。

『いい？石和くん』

前置きにはやがおうにも緊張する。

『時間は11時。石和くんが指定したビーチで大丈夫だから』
合う場所は京が決める事になっていたから、京は沖繩に来て初めて
会社の上司に連れて行ってもらったビーチを指定したのだった。あ
のビーチで見た夕日を祀に見せたい、と思ったから…。

『大丈夫だと思うけれど、くれぐれも見つからないように気をつけ
て』

そんな言葉を残し通話は切れた。
十分に承知している。祀の親は金持ち。この逢瀬がばれればどんな
事をしかけて来るかわかったものではないのだ。
ぎゅっと拳を握り、京は前を向いた。

腕時計を確認する。

目の前に広がるビーチに打ち付けられる波の音を聴きながら苦笑し
た。

時計はまだ10時を回った所だ。逢いたい気持ちを抑えきれずに早
く家を出てしまったのだ。

今日は平日だったけれど、会社は気持ち良く休みをくれた。

『石和は良く頑張ってるからな』

と社長は快く休みを承諾してくれたのだ。夏休みもとらずに精をだ
した結果というもの。

真っ白な砂浜に腰を降ろし、寄せては返す波を見続けた。

綺麗なエメラルドグリーンは、沖繩の陽をきらきらと照り返し更に
鮮やかになる。この景色を祀と見たいとそれだけを願っていた。

どの位の時間をそのままで過ごしたか、ふと気になった京が腕時計
を見ようとした時だった。

「ああ、絢世！これ」

と言う声が聞こえる。頭を上げると一台の黄色いタクシーが見えた。
その横に愛おしい人の姿を認める。あの時から止まってしまった時
間が動き出した気がした。

何やら話をした後、連れの男がタクシーの中に戻って行く。そのまま走り出したタクシーの祀が一礼をしているのを確認し京は歩みを寄せた。

美しい後ろ姿に声を掛ける。

「…祀…」

あの華奢な肩が小さく震えた。

漸く逢えた喜びに、今すぐにも抱きしめたいのに祀は振り向いてくれない。どうかしたのか？と思い再度呼びかけた。

「…祀？」

それでも振り向いてくれなくて京は焦った。

もしかして、本当は自分に逢いたくなかったのか。

こんなにも想っていたのは自分だけなのか。

そんな疑心暗鬼に囚われた京は、しかし自分に言い聞かせ目の前にある華奢な肩に触れた。

その瞬間、京を衝撃が襲う。己の胸に飛び込んで来た祀の身体は小さく震えていて、微かに聞こえる嗚咽に疑心暗鬼は一気に払拭された。

小刻みに震える身体を大きな腕で優しく包む。

「祀…逢いたかった…」

包んだ腕に力を込め、そつと囁く自らの声も涙に濡れていてどれ程お互いを恋焦がれていたのかを物語っていたようだった。

京は祀の薄い色の髪に鼻を埋め、その懐かしい香りを鼻孔いっぱい吸い込み堪能する。

顔を上げた祀の視線を受け、自然と優しい笑みが口角に浮かんだ。どちらからともなく顔を近づける。そうして、久方ぶりの口付けを交わした。

ゆつくりと陽が傾いて行く。

波の音を聞きながら、横にある祀の体温を感じるとそれだけで幸せ

な気分になる。

お互いに、逢えなかつた分色々と言った。

勿論加良の事も…。

「加良ちゃん…やっぱりまだ駄目みたい。僕達の想い、逆に彼女を苦しめてるのかな？」

綺麗な顔を苦痛に歪ませて、ぼつりと祀が呟いた。

それは京もずつと思っていた事。日本人形のように美しい加良が浮かぶ。

一瞬苦笑に満ちた顔をしたけれど、祀を不安がらせるだけだから直ぐに笑顔を浮かべた。

「…彼女は強い。あの状況でも俺達を守ろうとしてくれただろ？あのまま彼女が退学していたら、彼女まで悪者になってたと思う。それは違うよ。…今は、加良ちゃんの強さを信じるしかない」

それでも曇る祀の表情に、京は力強い笑顔を向ける。

「大丈夫！加良ちゃんは1人じゃない。影からでも支えてくれる川崎さんがいるんだから。だから俺達がそんな顔してたら失礼だよ。

今は信じて前を向いて行こう…」

自分にも言い聞かせる。

今は信じるしかない。

川崎の力、加良の力を信じて、前を向いて行く。

それから、沖繩の地に入りずつと考えていた事を、祀に伝えなければならぬ。

それはある意味“さよなら”を意味していたから中々口にできなかつた。

本当にそれが正しいのか解らない。けれど、今の自分達にはそれしかないと思つたのも又事実だつた。

この綺麗な人を傷つけるかもしれない。

もしかしたら、本当の意味でさよならを告げられるかもしれないのだ。

臆病な自分が居るのを認め、1つ息を吐いた。そうして祀を見ると

思いがけない強い瞳とぶつかった。

「僕、大学に行くよ」

突然に語られる。

「そうして、誰にも文句を言わせない程になる。だから、大学を卒業したら：“此処”に来ても良い…?”

最後はとても小さい声だった。

これは、つまりそれまで京には逢わない、という事を案に含んでいる。

自分が今言おうとした事を、どうやら先に言われてしまったようだ。ぎゅっと瞑られた瞳が其処にはある。どれ程の事を考えこの決意を口にしたのが伺えて切ない物が溢れてきた。

俯いてしまった祀を見詰め、少しでも重い物を取り払えればと思う。だから京は、はあゝ、とわざと溜息を吐いた。横にある薄い肩がピクリと揺れるのを横目に、小さく微笑む。

「まったたく…」

苦笑を交えながら言ってみると、涙に滲む声が聞こえた。

「う」

続く言葉を言わせたくない。だから京は笑いながら祀の言葉に被せる様に言った。

「先に言うなよ」

ふいに祀の顔が此方を向く。京は祀が不安にならないように精一杯の笑顔を浮かべた。

「5年かあゝ…。きつと直ぐだよな？」

確認するように呟くと、涙に揺れる祀の瞳が安堵へと変わる。

そう、これでいいのだ。

最愛の人を不安にさせてどうするのだ。

自分は絶対に待てる自信がある。

5年。

きつと直ぐではないけれど、でもこの気持ちはなくならない筈だ。

其れはきつと祀同じ筈だ。

きつと待てる。

絶対に待てる。

待って、そうして祀を受け止めるのだ。自分は強くならなくてはいけない。

それに、美しい人が、加良が懸命になって守ろうとした想いだから変わる筈がないのだ。

そう強く心に想い京は目の前に広がる碧い海を眺め、横に居る愛おしい人を抱き締めたのだった。

現在

からん、とグラスの氷が揺れる。

その音に加良は目を上げた。

初めて知った事が沢山あって動揺する。視線の先に雛奈の凜とした、しかし優しい笑顔を認めると折角収まった涙が再び顔を出した。

まずは謝らなければならぬ。

「雛奈さん…私何も知らずにあなたに酷い事をしたわ。…謝っても許して頂けないのは解っていますけど、言わせて」

改まった加良の言葉に雛奈の顔が歪んだ。そうして笑顔を浮かべる。

「ストップ。あんたに謝られるような事は何にもないわ。其れに謝罪なら“王子”にしてもらったからいらぬわよ」

豪快に笑い雛奈は酒をあおった。

これはどうやら聞いてもらえそうにない。

加良は諦め、再度祀に顔を向けた。優しい笑顔が其処にはあって自然と自分の口角も上がる。やっと親友と逢う事が出来て加良は幸せだった。

しかし、其処で思考が止まる。

昔話では5年、2人は逢わなかったのだ。

その後、京とはどうなっているのか聞きたかった。

「あの、祀くん…?」

静かに声を掛ける。祀は、ん?と顔を上げた。

「…京くんは…?」

恐る恐る聞いてみると綺麗な祀の表情が無くなる。それを見た加良は、失敗した、と思った。

聞いてはいけなかったのだ。

やはり5年、という歳月は長すぎたのだ。

やっぱり、自分は親友2人を守れなかったのだ。

自分があの時…。

思いに沈んで行く加良の耳に電子音が響いた。ふと顔を上げると、祀が携帯を取り出している。その液晶を確認し、綺麗な顔が薫るように綻んだ。携帯のぼたんを押しながら祀は加良を見る。そうして、「ちよつと待ってて」

そう言い残し店を出て行った。加良は手の中にあるグラスを見詰める。

どうしたって沈んでしまう心を弄びながら加良はグラスを煽った。

そんな加良の耳に再度店の扉が開く音が聞こえる。ふと視線を上げ、そうして加良の大きな瞳から再度雫が零れた。

颯爽と歩いてくるその姿は、記憶にある姿よりも大きく逞しい物になっていただけで、日本人離れした顔には見覚えがあった。

「京くん…」

そう呟くと日本人離れした顔が妖艶に笑みを広げる。大きな手が加良の小さな頭に寄せられた。

「相変わらず綺麗だね、加良ちゃん」

そんな事を言う。加良は泣き笑いで応じ、そうして京の横に居る祀を見た。幸せそうな笑みを浮かべている。

つまりは、2人はちゃんと今でも思いあっているのだ。5年という歳月を乗り越え幸せになったのだ。

「…良かった」

自然と口から出た言葉に祀と京は笑みを深めた。

他の人間は2次会に流れたけれど、祀、京、加良の3人は帰路を選んだ。

夜も随分と更けたのに、都会は賑やかさを維持している。喧騒を横目に3人は歩いた。

そうして、ヒートアイランドを少しでも和らげようとして作られた

のか、喧騒の都会の中に小さな緑の公園を見つけ、自然と3人はその中に入る。

遊具、と言えるものは殆どないが、辛うじてベンチは見つける事が出来、京は祀と加良をそこへ誘った。

京、加良、祀、の順番でベンチに腰掛ける。普段男性に囲まれる事の無い加良は居心地の悪い物を感じた。

男2人の顔を交互に見る。2人は何故だか加良を見ていた。

「…あの」

堪らず声を上げると、優しい祀が返事をする。

「何？加良ちゃん」

加良は眉間に皺を寄せながら再度2人を見た。

「この配置は可笑しいような気がするのだけれど…」

加良の言葉に祀は笑みを広げる。

「そんな事ないよ。僕たち加良ちゃんに物凄く逢いたかったんだ」

まるで告白をされているようで、やっぱり加良は居心地の悪い物を感じた。助け舟を求めるように京を見るけれど、その笑みは一層広がっていてどうやら聞き入れてもらえそうに無い。

加良は諦めてこの配置を受け入れた。

「ごめんね、加良ちゃん」

京の声がする。

「ごめんね、加良ちゃん」

続けて祀の声がする。

加良は2人を交互に見た。2人が何を謝っているのか解らなくて答えに困ってしまう。

「あの時」僕が助けて、なんて言わなければ、加良ちゃんが辛い思いしなくてよかったのに…」

辛そうな祀の声に急いで反論しようとしたけれど、大きな身体に包まれて阻まれてしまった。続いて京の声がする。

「俺たちが“あの日”加良ちゃんに卒業してなんて言ったから、余計辛い思いをさせたよな」

そうして更に大きな身体に包まれる。加良は急いで首を振った。

「何を言っているの?! 辛い思いをしたのは祀くんと京くんでしょう?」2人の苦勞に比べれば私の苦勞なんてたいした事なかったわ。今なら解るもの…。私を見守っていてくれた人がいたって事を。だから謝らないで…」

加良を包む腕に力が込められる。

「…ありがとう。僕達ね、今一緒に居るんだ。“あの時”加良ちゃんが必死に守ろうとしてくれたこの気持ちを維持する事が出来て、やっと自由になれた。こうやって加良ちゃんにも又会えた」

「加良ちゃんがいたから、俺達いろんな事を乗り越えられたんだ。逢えない時間はあったけど、今こうして一緒にいられる。加良ちゃんのお陰だよ。俺達を守ってくれて、本当にありがとう…」
2人の体温に包まれて、加良の凝り固まっていた気持ちが解けて行く。

ああ、自分はどうにかこの2人を守れたのだ。
色々な事があったけれど、2人は自分がいたから乗り越えられた、と言ってくれた。

今、幸せだと、そう言ってくれた。

“あの時”から時間が止まってしまっていた加良は、今こうして親友2人に会えて、2人の幸せを確認して、漸く一步が踏み出せるような気がする。

2人の男に包まれながら辛うじて見える夜空には、都会には似つかわしくない星が煌めいていて頬が緩んだ。

ちらり、と自分を包んでいる2人を交互に見る。

そうして口角を引き上げ、

「何時までも幸せでいてね…」

とそう言葉を紡いだのだった。

現在（後書き）

やっと、終わる事ができました…。

最後まで読んで下さった方、稚拙な文で申し訳ありませんでした。
そして、ありがとうございます。m () m <

又、何処かでお目にかかる事があれば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0375p/>

想いでの中から

2011年5月22日23時25分発行